
シンク

かいじゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シンク

【Nコード】

N8152F

【作者名】

かいじゅう

【あらすじ】

学校なんてこんなもんだ。現役高校生が書く高校生の嘘じゃない本当、そのうちみんな大人になる、学校なんてそんなに大変なところじゃない。真っ直ぐではないけど、僕はちゃんと話せていますか？笑っていますか？うそつきでごめんなさい。

1話；チリの山

君の後姿をいつも見てた。追いかけているのはいつも僕だった。君が欲しい。

人とのかわり度で一番濃いのは何だろう。その人の24時間とかを支配できる感情、そんなものがあるなら、それに漬かってみたい。初恋をしたこの体は、それでもあなた以外のことを考えようとする。ぼくの24時間はまだ ぼく の物だった。いつからか教わりもせづに僕は美しい物に見とれ少なからずに、胸をときめかせた。

春の葉の舞い散るさまとか、きんもくせいのかおりとか、女の子の生々しい匂いとか。

僕は性別上オトコだけど美しい物に性別なんていう、分かれ目は無い。

一番の美しさはどちらにも見受けられる。

そんな芳情に恋をした。何度も何度も覚めやらぬ、思いを知った。

そんな自分が今一番求めている物は、一番な存在だって気づいたのは、親友という物がこの年になって初めて出来たからだ。

高校一年の僕には少しみんなとなじめない節があり、休日に遊ぶような友達には少なかった。

それも自分の望んだことで、少なさに満足していたのだが、暮らす全域の人々と友情を分かちタイプの友達が一人出来たせいで僕には見る見る友達が増えていって、学校に価値を見出さなくなっていた。一人を理解するのに一年で三時間程度しか取れないような友情関係になってしまった僕の周りは、チリのように人が集まるようになって、やがてぼくは埋もれてしまった。

そんな時クラスで一人、僕と話さない人を見つけた。

名前は知らないがきれいな茶色い髪の色に言うふりよう　みたいな。おとこだった。

横暴な行いはしていなかったようだが、少し態度が悪いらしく、クラスでは一部の人間としか会話をしなかった。

このチリに埋もれた自分から離れるには、彼と何かで結ばれるしかないと思う。やっと僕は自分の周りを見回した。

自分としゃべりに着ているのではない周りのやつらは僕の瞳に友情を見せ付けるだけで、僕のことを詮索しようとするやつは独りも居なかった。

自分の席から3つつ離れた、彼に近づくのは難しかった。何かしているようではないが、僕と挨拶する気など無いのだろう。机とそいとげ眠っているような格好で突っ伏していた。話す内容の無い自分では、彼に話しかけるなど出来ない気がした、それでも話しかけた、僕の声で。

「きれいな髪。」良いながらくしを通していないため少しぼさついている髪に目を向ける。

するとむくつと動いて彼が、「お前は中国の髪買いみたいなこと言うな。」といった。

「僕の名前知ってる？」かれの初めての声は自分の心の中にいれ、自分を知ってもらおう。

僕の問う声に彼は、「青質 有為だ。」と僕の名前ではないことを発した。僕は、「それ誰の名前？」と聞いた。彼は「俺の名前。」と喋ってあごをしゃくった。僕は「仁鯉 ニジムです。」と自分の名を答えた。

彼の名前は あおしち ゆうい 僕の名前は じんこい にじむ

彼は自分のことをたくさん僕に教えてくれる、それは好きだった歌手だったり。前売っていた飲み物だったりして、僕の記憶の片隅にいつか植えつけられた物だった。昔の話しかしない彼。いや僕は彼を ゆい と呼ぶことにした。 ゆいは今のことをあまり話したがらない。

希望は昔にあったのだろう、自分の好きな歌手の魔法使いのような声とか、絶対に飽きないと思っていた味とかに、ゆいは執着しているように思えた。

そのうち自分からはチリが解けていって、僕には休日遊んでいた友人とゆいだけが残った。

ゆいの変化は著しかった、髪が黒さを取り戻し、話はすこしづづ未来の過去へと変わった。それでも、僕はゆいの本当を聞けなかった、ゆいは知らずに居るのだろうか、このクラスのことを

自分と話している数人の人間だけが学校という存在で、そのうちだけがゆいの学校なのだ、きっと僕はこの友人とうまくやっていける。しかし、髪の色が変わったことで先生はゆいの人間性を見せ付けられることになり、急激にクラスでの存在感がました。授業にも出ているように扱われると、人々が僕の周りにまた集まろうと、声をかけてくるようになった。

僕はそれにそっけなく答え、昔を思い出しチリの生活を思い出した。ゆいに逃げ込んではいけない。分かっている。ゆいの数人の理解の人から、ゆいを取りすぎるな、といわれた僕は、これ以上彼らのゆいとの時間 をとってしまうと、ゆいと引き話されてしまうだろう。ゆいは僕のところに来てくれるだろうが、そんなに学校生活に依存してはいけないと、自分で分かっている。ゆいはびっくりするほど自然に教室で僕に挨拶してくれる。

そんな友達はもはや、ゆいと あと数人しかいないのだ。しかとを続けた友人達は挨拶をあいまいにそっけなくする僕とは、一緒に居ても温まれないと気づいたのだろう、もう僕を見て友達のように少し顔を緩ませることしかしなくなってしまった。ゆいは相変わらず、僕と数人の理解の人と話すだけだ。

学校がドンドン僕の生活の場所になっていっている。昔は執着しなかったのに今は休日に遊ぶ変わらない数人に執着している。ゆいは無くてはならない存在になっている。これが普通の学校なのか。僕は学校にくることをなんと10年目ではじめて体験しているのだ。

2話・序盤の搭乗者（前書き）

僕の友達は・・・

2話・序盤の搭乗者

今日の朝、挨拶をした人たちは5人。僕の友達は何人？

ゆい

その他

その他

その他

その他

今日挨拶した人たち。これから過ごしていくには、このその他さん
たちを
友達として人格を確認しないと、

その他・1

五木 裕也 中学のときの友達で、一緒にクラスになったことが無くて話す機会が無かったが、二年のときクラスが一緒になって仲良くなった。

意外と人気があつて、顔はいつもにやけてて、彼はそんな人だった。

でも僕は彼が中学三年の時から10人以上から、暴力を振るつてお金を巻き上げているのを知つ

ている。その10人という人数は僕と彼を除いたクラスの男子の数だった。

分かりづらい性格と中学クラスでは女子からミスティアスとして人気があつたが、本当は

短気で頭のいい普通な人だった。

ぼくはその一面の彼にあまり惹かれず、いつの間にか離れた。で

も今はそんな一面をうまく隠

したこのクラスで沢山のぼくのチリだった人々と、楽しく遊んでい

る。

彼とは休日に遊ばない友達といった関係だ。

でも、仲はいい。

その他：2

長瀬 勤 クラスの実行委員を務める勉強中心な人だ。

スポーツも難くこなして、友達も沢山居る。彼はきつと学校が楽しいだろう。

彼はぼくと中学が一緒でおんなじクラスだったことがあった、彼はそのとき同級生に

少しいじめられていた。少しというのは班を作るとき一人残される程度で、クラスの行事でクラ

スの仕切る男子が出こないときは、友達も数人いたし、彼はとても楽しそうだった。

今はこの学校でクラスを裏からうまく仕切っている。正統で誰にも平等に接する彼は、とてもうまくこの空間で生きていると思う。

彼はずっとぼくに、友達だよ。とっている。それはぼくが中学でいじめられていた彼とずっと一緒にいたからだと思う。

彼の誠実さがぼくをそうさせたのだ。

でも彼は

ぼくが彼を守るためにそうしたと思っている。クラスの、のさばっている男子の軽くて陰湿な仲

間はすれから、ぼくが彼を仲間に引き入れたのをいまだに恩として、ぼくを友達だと思っているんだ。

彼はチリじゃないぼくの大切な友達だ。そういう人だ。

その他：3

井川 暢 スポーツ万能な元気系でクラスの体育委員である。かれは人一倍明るく、女子に並以上の人気があるが、今までに彼に受け入れられた女性はいない、彼は女性を毛嫌いし自分からは決して寄り付こうとしない。

彼とは高校で初めて出会った。彼はぼくを始め仁鯉くんと呼んできて、堅苦しい感じがあった

が、今は鯉くんというおかしな名称で呼んでいる。

彼が正式な苗字以外で人を呼ぶのは、ぼくだけ、らしく

、たまにつられて彼の友人だと思われる人はぼくを鯉くん。と呼ぶがそうすると彼がすごい形相

でぼくを愛称で呼ぶ彼の友人だと思われる人を叱咤する。

その日以来、彼はぼく一緒に行動をしようとする傾向にあり、いつも声をかけてきてくれる。

ぼくは彼の何なのだろうか、半年付き合っているがいまだに良く分からない。

彼とは休日も遊んだりするが友人かどうかは分からない。

そんな感じ？

その他：4

原川 亜由美 クラスの風紀委員でその仕事に誠意を燃やしているらしく、ボタンを一つ外しているだけで、「それは風紀の乱れですから、直して。」とクラス生徒に促している。

クラスの男子に並以上にもてているらしいが、一向に男子に興味が無いらしく、振り向いたことは無い。

風紀委員なため、挨拶は誰にでもするのかと思いきや、以外にも特定の人間としか挨拶を交わさないとか、僕はなぜかかおを合わすたんびに挨拶されている。

彼女とは高校初登校の日に まあ、なんやかんや としかいえないくだらないことが有ったのだが、それ以来、僕のことは 知っているらしく、たまに声をかけてくる。

そして一月前に井川に怪我をさせられ今は学校に来ていない。彼女が井川に怪我をさせられたことは学校では知られていない。僕は井川からきいたのだ。井川は笑いながら、「ボタンがなんとかかいて触ってきたからふざけんなどおもって、おもいつきし殴ったら、足ふらつかせて、階段落ちていきやがった。」と僕に言っていた。

これは本当だろうか？

僕はそういう暴力的な井川をこの目で見たことがない。

彼は人一倍周囲に気を使うタイプで、毛嫌いしている女子には、とくに気を使っている。

彼女がボタンのあいていることを注意したくらいで、殴り飛ばすなんて、考えられない。
きっと井川は何らかの理由で嘘をついているか、あやまって彼女を階段から落下させてしまった
のだろう。

彼女は学校に来ていない、いつになったら来るつもりなのだろう。

その他・1 いつき ゆうや

その他・2 ながせ つとむ

その他・3 いがわ のぼる

その他・4 はらかわ あゆみ

以上が現在の僕の友人てきな人々である。

その他の確認おわり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8152f/>

シンク

2010年10月28日00時57分発行